

受難節第2主日

「この人を見よ」

出エジプト20:1~17

ヨハネ8:1~11

(1)

聖書を何回読んでも、ピンと来ないと言う人がいます。しかし、ここを読んで、自分とは関係がないといえる人はいないと思います。特に、始めて聖書を手にした人でも分かります。

7章53節から8章11節には、カッコがついています。写本の問題ですが、いまその説明は省略します。

季節は、「春3月」―、「過越し祭」の直前、時刻は、「早朝」、場所は、「エルサレム宮」における出来事です。

「イエスは『座って』、彼らに教えはじめられた」とあります―、これは当時、教える者は「座り」、教えるを乞う者は「立って聞く」という習慣がありました。主イエスは神殿の石段に座り、群衆はグルリと彼を取り囲んで話を聞いていました。

「すると・・・」(3)、主イエスが教えておられた最中、ドカドカと入ってきたのが、「律法学者」と

「パリサイ人」人たちです。彼らは、姦淫の現場で捕えた女を捕えて、群衆の真ん中に引きずり出しました。姦淫の現場で捕えたというのであれば、相手の男はどうした、と言いたいところです。

「姦淫罪」は、明治憲法(明治22年)において成立しています。廃止されたのは、敗戦後の1945年、新憲法が公布された時です。お隣の韓国では、「姦淫罪」は最近まで、刑罰として適応されてきました。最近の西欧社会では、もはや刑事罰の対象ではないようです。当時のユダヤ社会において、「姦淫罪」が厳密に適応された事例がなかったことに不満をいだいていたのは、「律法学者・パリサイ人」たちです。この「律法学者・パリサイ人」は、自分のことは棚に上げ、他人のトラブルには、厳しく糾弾して止まない、人間の生まれながらの嫌らしい顔がのぞいています。「人の失敗は密より甘い」と言われてきました。あからさまに非難すれば、相手から嫌われます。面と向かって非難しませんが、腹の中では、人を裁いています。さらに、良くないことは、罪を犯した人を見て、あれよりは、まだ自分

はましだと、妙な優越感をいただくことです。

酔いしれて、車内の通路に倒れ伏し、ヘッドをはき、その上に倒れ伏していた若い男がいました。その真向かいの席に、父親と息子とが座っていました。そのとき、父親が息子に、「ああしたブザマな人間になつてはいけない」と厳しい口調で教えていました。しかし、息子にそれを教育している時ではありません、自分から手助けすることが出来なければ、車掌を呼ぶなり、なんなりと対処する事を教える方が先でした。幸いその後、すぐに車掌が介抱し始めました。

(2)

ところで、「律法学者」と「パリサイ人」たちは、主イエスの言うこと、なすこと、何かと揚げ足をとりうと、いつも機会をねらっていた人たちです。この時も、そうです。「姦淫の現場で捕えられた一人の女」を連れて来て、主イエスが律法に違反した女の人をどのような扱うか、どう判断、対処するか、お手並み拝見とばかりにやってきました。

仮に、主イエスが、「女を裁いてはいけない。赦してあげなさい」と

言えば、「これまで、先祖が大切に守ってきた、モーセの律法をナイガシロにするのか」と非難「ゴウゴウとなります」。

しかし、主イエスが「律法の教えに従って裁かねばなりません」と言えば、ユダヤの掟では、「石打ちの刑」と決まっていました。

「赦してあげなさい」と言えば非難されます。「石打ちの刑です」と言えば、「7度を70倍許しなさい」と教えてこられた主イエスの教えに反します。どう返答しようとも逃げるすべがないように思われしました。

「彼らはイエスを試そうとした」のです。いわば、言い逃れができないところに追いやり、主イエスならどう答えるか、パリサイ人も、群衆も、みな固唾を吞んで見届けていました。その時「イエスは身をかがめて、指で地面に何かを書いておられた」(6)と書かれています。

以前から、多くの人が、この時、主イエスが地面に何を書いたのか、いろいろなと推測してきました。「絵」ではないか、いや、「罪」という文字ではないか、いや、いや、「悲しみ」という文字を書いてお

られたと、さまざまに想像を巡らしてきましたが、実際は誰にもわかりません。

この時、主イエスは、自分をとり囲む周りの鋭い視線から身を避けるかのように、その場にしゃがみこんだのです。なんて絶妙な「間」の取り方ではないでしょうか。

間を取るといえば、横浜の教会の役員会では、意見がなかなか噛み合わず、天を仰いだことがしばしばありました。そうした時、ふと、私は、席を立ち、トイレ・タイムを取りました。トイレから帰ってみると、不思議と、部屋の空気が一変していることが、しばしばありました。余計なことを申しました。

この時、主イエスが、「地面に何を書いておられたのか」「何でしゃがみこんだか」ということをアレスし考えるかもしれません、しかし、それよりもっと注意すべきは、この時の主イエスの表情です、憤慨していたとは思いませんが、恐らく、悲しみに耐えていた表情と思われまます。

東京のプリジストン美術館に、「シヨルジュ・ルオー」の「審判」という絵があります。「絵」の真ん

中に、少しだけ頭を垂れている「一人の女」が描かれています。後方のひな壇には、「男たち」が、目を見開き、列をなして座っています。それが「裁判官」なのか、「裁判を傍聴している人達」なのか、よくわかりません。いずれにしても、「罪ある女」を裁こうと、大きく面目を見開いている人達です。

ところで、ルオーという画家は、不思議なことに、実に多くの「裁判官」や「法廷」をテーマにした絵を残しています。

特に、「裁判官」の顔を、ルオーは極端にデフォルメして醜く描いています。「法」を守り、「正義」を代表する裁判官は、世間からは立派な人物とみられていますから、当然、威風堂々と描くのが普通です。ところが、ルオーは、極端に、醜く歪（ゆが）んだ顔を描きました。

裁かれている人間は惨めな立場です、それに反して、人を裁いている立場の人間は、いかにも立派に見えます。しかし、ルオーが、人を裁く人間の顔を、出来る限りデフォルメして、醜く・歪んで描いたのは、「人を裁く」―、いえ、裁けると思う顔がのぞいていたから

ではないでしょうか。この時のパリサイ人、律法学者の顔にも、それがのぞいていたといえないでしょうか。

ルオーは、裁かれている女のかたわらに、座り込んで悲しみに満ちた、「青白い顔のイエス・キリスト」を描きました。主イエスだけが、この女の悲しみを、ご自分の悲しみとしている様子を描こうとしました。裁かれている女の悲しみより、キリストのほつが、さらに深い憂えをいだきながら、悲しみに沈んでおられた様子を画いたので

す。

子どものころ、よく母親に叱られました。叱っても、叱っても、なかなか悪さが止まらないわが子に、ある時、母は縫い物の手を止めて、下を向いて泣きはじめました。どうしたのと顔色をうかがっても、何も言わないで、いかにも耐え難い様子で泣いています。ねえ・ねえと身を揺すっても、泣いている、もしかして、とんでもなく母を悲しませているのではないかと気づき始めた時、それが一番こたえました。一番効き目がありました。これ以上、母を悲しませてはいけないと、子どもなが

らに反省しました。

罪をおかした女を取り囲んでいる多くの者たちが、気づいていない女の悲しみ、その悲しみを身に受けて、しゃがみこんだ、「キリストを見よ」と語りかけているのではないのでしょうか。

(3)

ところで、主イエスが地面にしゃがみ込んでいた時、なおも周りのものたちが、ヤイノ・ヤイノと言いつけるので、やおら身を起し、「あなたがたのうちで、罪のないものが、最初に石を投げなさい」と言われました。それから、再び地面にしゃがみ込みました。2回目

目のしゃがみ込みです。

「あなたがたのうちで、罪のないものが、最初に彼女に石を投げなさい」と言われて、周りにいた者たちは、はじめてわが身をかえりみました。ある写本には、「良心が責められた」とあります。

九節に、「これを聞くと、年長者たちから始めて、ひとりひとりが立ち去り、最後に主イエスと罪の女だけが残された」のです。法廷は完全にバラけてしまいました。

それにしても、その場から「ひとり・ひとり出て行った」というシ

ーンは、ズシーンと私達の胸に響いてきます。

日本のキリスト教会で、今日まで一番読まれてきたといえ、山室軍平の「平民の福音」ではないでしょうか。彼は、そのなかで、人が罪を犯す時の3つのパターンを挙げています。

1つは、「みんなしているから」。

2つ目は、「一度だけだから」。

3つ目は、「誰も見ていないから」。みんながしていると思えば、自分を見失います。見失っている自分を取り戻すには一人になるしかありません。一人になって、この女のように、主イエスと向かい合わねばなりません。

「年長者から」とは、いかにも印象的です。年長者は人生の場数を沢山踏んできました。それで、自らを省みて、一番早く、その場から退散したのです。しかし、何も老人だけの問題ではなく、「中年」も、「若い者」も、胸に手を当てれば、みんな思い当たる節があります。

それまで、罪の女に投げようと両手にシッカリと握りしめていた石一、その石は、いまや手の中で熱くなっていたかもしれませんが、そ

の石を、その場にポトリ・ポトリと落として、一人・一人がその場を立ち去りました。われ先に、この女に石を投げうるものは、一人もいませんでした。ということ、
「自分には罪がない」と言い切れるものは一人もいなかったということになります。

すると、再び、主イエスは身を起こして、その女に言われた。「婦人よ。あの人たちは今どこにいますか。あなたを罪に定める者はなかったのですか」彼女は言った。「だれもいません。」

すると、さらにイエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない行きなさい。今から決して罪を犯してはなりません。」

「今からは、決して罪を犯してはなりません」一、これまでに、おかしてきた罪を、悲しみ、憎しみ、本心に立ち返りなさいとの、ありがたい励ましの言葉ではないでしょうか。

不思議なことに、主イエスはこの婦人のそれまでを問いません。問おうともしません。問いただしもしません。むしろ、「今」と「これから」に、ひたすら、その関心を向けています。わたしたちは、こ

のお方を、しっかりとみつめねばなりません。

ローマの総督・ポンテオ・ピラトが「この人を見よ」と指さした時の「キリスト」には、威光も尊厳もありません。衣服をはがれ、裸にされ、茨の冠を頭に被せられ、荒縄で両手を縛られ、「ゴルゴダの丘の十字架に架けられたキリストを指さして」「この人を見よ」とピラトは言いました。何を見ろというのでしょうか。地面にしゃがみ込んで、何やらものを書きながら、世の罪を一身をもってになおとしておられたキリストから目を離してはならないのです。

イザヤ書53章4節以下を読んで終わります。

「まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみになった。(しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。しかし彼はわれわれのことがのために傷つけられ、われわれの不義のために碎かれたのだ)。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」。

【祈ります】

受難節を迎えています。「我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府(よみにくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり)―、この使徒信条の告白を心に刻みながら、受難節を迎えたく思います。少しでも、世の罪をになつておられる主の御苦しみに思いを潜めるものとならしめてくださいませ。

主イエス・キリストの名により祈ります。「アーメン」。